

人を理解できなければ、人から理解されない

ジャーナリスト 海部 隆太郎

ある経済学者を取材した。テーマはアベノミクスだったのだが、いつもの悪い癖で質問が脱線し、理解できない人たちという話で盛り上がってしまった。当該人物は大学教授であり、学生時代は数学専攻。ことのほか数字に強い。「数学を理解できない人が、どうして世の中を理解できるのか、雰囲気だけで理解したつもりでいる」と、コメンテーターでテレビに登場する文系出身の経済学者をトコトン批判する。

その具体的な内容は割愛するが、すべては数学的な発想が必要と主張する。それを感情的に力説する姿は、数学的ではなかったような気もするが、冷静に数学で世の中が割り切れれば、戦争のような愚かな行為は無くなるのではとも思ったが、人は感情で動く生き物だ。

ここで言いたいのは、仕事ができる人は自分の行動に自信があり、仕事への哲学をもっている。メンタルヘルス的に言えばストレス耐性の強い人だ。ただ、これが時として裏目に出ることがある。そこにあるのは自分を絶対視する姿であり、自分と異なる考え方に耳を貸そうとしない、ということだ。

積極的な「さとり世代」への対応は

最近、頻繁に目にするのが「さとり世代」という言葉。

これは「ゆとり世代」の若者たちが、上の世代からの批判に反発し「自分たちは落ち着いており悟っている」とする自己主張。昔は出世願望を誰もが抱いていたが、この世代にはない。競争のない人生を歩んできたので、あくせくする必要性を感じていない若者たちである。

意識的にオンとオフの切り分けを主張し、上司との酒席などは断るのが当たり前。仕事も言われたことはやるが、積極性に欠ける。話しかけても乗ってこない。このような若者は、どこの会社にも必ず複数いると思う。この世代の若者が部下にいたらどうするか。どなればパワハラ懸念が出る。なだめすかしても暖簾に腕押し。

ではどうすればいいのか。

若者の行動に詳しいLBM研究所の渡部卓代表に聞くと、「傾聴」という手法があるそうだ。相手に傾いて、相手の話を聞くこと。つまりは相手を理解することから始める。といっても人を理解するのは至難の業。何を考えているのか傾向性を掴めばいい。間違いと思う行動は、指摘して修正する必要性を説く。認知行動療法的なことを地道にしていくしかない。

そこには人を理解しようとする考えがなければできない。冒頭の紹介した自分だけが正しいという考え方は人を理解できず、自身も他から理解されないことになる。30年近く連れ添った妻だって何を考えているのが理解できない時がある。まして他人を理解するには、努力と時間が必要だ。まずは、自分の姿勢から改めるべき。

筆者紹介

海部 隆太郎 (かいべ・りゅうたろう)

法政大学卒、日本工業新聞社、IT企業の広報部長を経て2009年に独立。メンタル問題など企業が抱える幅広い課題を取材する。

